昭和25年３月14日　第三種郵便物承認　令和３年７月１日発行（毎月１回１日発行）通巻863号

禅の友

—Zen no Tomo

7
July 2021

ご本山だより

大本山永平寺【浄祖正当】

大本山永平寺では、毎年七月十七日に「浄祖正当」が修行されます。

「浄祖」とは道元禅師さまのお師匠さまである中国天童山景徳寺の如浄禅師さまのことで、「正当」とはご命日のご供養のことです。

法堂では山内の僧侶により、出班焼香という慇懃な法要が修行されます。また、永平寺の歴代住職の霊石（供養塔）をご供養してある寂光苑には、中国杭州浄慈寺にある如浄搭と同形同大に作られた如浄禅師の霊石が建立され、今なお大切にご供養されています。

道元禅師は御年二十四歳の時、真実の仏法を求め宋の国へ旅立たれました。宋の国での様々な出会いがあった中、お釈迦さまから正しく伝わった仏法を如浄禅師さまから受け継ぐことができました。

それは正に命がけのご修行であり、千載一遇のご縁だったのです。

お釈迦さまから正しく伝わった仏法は如浄禅師さまから道元禅師さまへ、道元禅師さまが日本へお戻りになられてからは、永平寺の二祖、懐奘禅師さまへと伝わり、一度も途切れることなく脈々と伝えられ、現在に至っております。

その正しく伝わった仏法とは、大本山永平寺での修行の中心である「坐禅」にほかなりません。この「坐禅」は現代社会においては、大本山永平寺のみならず、日本国中また世界中で修行され親しまれております。

青々とした大自然に抱かれた大本山永平寺では、今年も多くの修行僧たちが如浄禅師のご供養をし、毎朝の暁天坐禅は勿論のこと、日日の行持においても身心を調えて報恩の修行をしております。

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺【恩力を受け来ること多時なり】

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二一

山法師

年の半分が過ぎ、總持寺では七月のお盆を迎えようとしています。今年も感染症の影響を受け、お檀家を一軒ずつ周る棚経もやむなく中止とさせていただき、大祖堂裏手の墓地に於いて、希望される方へ「墓経」を行うことになりました。先祖を偲び、感謝の誠を捧げることにおいては、棚経も墓経も同じご供養の御心の表れだと思います。

松尾芭蕉が「奥の細道」で高岡から小矢部を通り倶利伽羅峠を超えて金沢城下へ入ったのが七月十五日。この日弟子の小杉一笑の死を知ります。三十六歳。まさに盂蘭盆会のその日でありました。

会えるとばかり楽しみに思って旅をしてきた芭蕉は悲嘆にくれたそうです。

そこで一笑の追善会で詠んだのが「塚も動け　わが泣く声は　秋の風」で、これほど感情過多な悲愁漂う作品はないと言われています。

私たちは先祖や家族、また親しき御霊への思いは忘れてはいけませんし、そのご恩のためにも良き教えを学び実践するように心がけることが大切なのです。瑩山禅師お示しの『伝光録』に「恩力を受け来ること多時なり」とあります。この場合の恩とは仏の恩を示しますが、この世には他にも沢山の恩があります。

高くそびえる鉄囲山や大須弥山、広大な四海や九州と比類ない恩に気付かせていただく行持が盂蘭盆会であります。

曹洞 俳壇

選・坊城 俊樹

駐車場サーフボードが春を待つ

奈良県　鈴木 重雄

評　現代的な句。この風景は海岸の側にある駐車場だと思った。まだ寒い海にあまり波はこない。波が出てくるまでのんびりと待っているサーファーたちの様子が見えてきた。若者たちよりも格好いいサーフボードが色取り取りの春の装いをしている。

かんばせの傷に艶あり猫の恋

鳥取県　眞山 博充

評　雄猫の顔にある傷はただの額の傷ではないらしい。それは艶めいた戦いの証。むしろ勲章なのだろう。昨晩の恋猫たちの決闘の様子がまざまざと見えてくる。「傷に艶あり」という措辞を初めて見た。まさにこの季題にぴったりの傷の様子である。

◆霾（つちふ）るや色無く天は海に落ち　三重県　苅屋 奈良美

◆県境を越えれば訛る帰省バス　秋田県　小田嶋 恭葉

◆半眼の仏の顔やしじみ汁　岩手県　鈴木 道昭

◆逆上りやうやく出来て五月晴　京都府　島崎 佳子

◆モーツァルト流して一人剪定す　岐阜県　大下 雅子

◆散る花や開くことのなき乳鉢門　大阪府　柏原 才子

◆起きるべし春の夜明けの酸素濃く　静岡県　小川 健治

◆花月夜狐踊ってをりさうな　静岡県　小泉 八千代

◆春なのに春だからふと思ふこと　東京都　藤森 荘吉

◆真剣な子の嘘聞くや四月馬鹿　三重県　西村 廣視

選者吟

立春大吉贋（にせ）のバナナはまつ黄つ黄　俊樹

作句小見　「贋のバナナ」とは東京は合羽橋の商店街にある食品サンプルのこと。レストランのショーウィンドーによくあるやつ。蝋細工であるからかやけに原色の黄色が目立つ。季題はおおげさだが、立春のめでたさをこの贋物のバナナさえ祝福している。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

診察をじつと待ちゐる長椅子は冬の湖漂ふカヌー

岐阜県　後藤　進

評　待合室の長椅子をカヌーに喩えて、そこに座って診察を待つ作者の不安感を表現している。「冬の」は、その部屋の気温の低さのことではなく、作者がいだく不安の強さに他ならない。構成上は、長椅子が主体であるところも面白い。

危機ありて新しき世界開けゆく何かは知らず　面あげて歩まむ

イギリス　バロー 典子

評　新型コロナウイルスによる世界的危機。これを機に世界は大きく変わるであろうと考える作者。困難な状況下にあって事態を前向きに捉えようとする姿勢が潔く凛としている。

◆揚げ雲雀下りる雲雀のたえまなく荷利ケ丘に雨あがりけり
鳥取県　徳本 義則

◆聞こえくるラジオの声の清らかさ彼にも迷ひはあるだろうに
秋田県　小松 紀子

◆人間をやめる訳にもいかなくて羊の群の雲を見てをり
東京都　長谷川 瞳

◆少子化で先行き不安の集落にコロナ逃避の転入者あり
鳥取県　山本 浩一

◆米沢の兄の誕生日に手紙書く近くて遠いコロナ禍の日々
岩手県　千葉 喜惠

◆ゆっくりと部屋をめぐった白い蛾はもしやあの人きっとあの人
大阪府　柏原 才子

◆煩わしい付き合い減った自粛中楽しくないが困りはしない
奈良県　鈴木 重雄

◆子を頼り村を出でたる老友を呼ぶがに空き家の風鈴鳴りぬ
秋田県　小田嶋 恭葉

◆花曇り鰊曇り胸にあたためて彼岸の雪の降りしきるなり
北海道　菅原 三江子

◆運転席に吊るした亡母の指貫はカーブのたびに揺れを楽しむ
三重県　西村 廣視

選者詠

廃業せし店舗の壁を巻き覆う藤蔓にあまた下がる花房

ちづ

作歌小見　山本・千葉・鈴木・小田嶋の四氏の作品もコロナ禍が詠われ変化してゆく世界が身近なところから捉えられています。早くワクチン接種が進んで人々の本来の活動が出来るようにと願うばかりです。藤の花房には時の凄みがあります。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。